

学びをひろげる

(第31回)

※ ○は、自分以外の参加した人の数です

まる (わたしと○人の会)

日時 2019年9月14日(土) (1時45分~5時)
場所 城東区民センター4階 小会議室
〒536-8510 大阪市城東区中央3-5-45 TEL06-6932-2000
参加費 500円(会場費・運営費等) ※学生は、無料です。

一人で拓げられない学びを○(まる)人が集まり、多様な人たち(年齢、国籍、職種など様々な人たち)との出会い・対話を通して自分の学びを拓げ、授業づくり・教材づくりをしませんか。もう一度、教育・授業のあり方をていねいに見つめ語り合しましょう。



地下鉄 長堀鶴見緑地線・今里筋線「蒲生四丁目駅」1番・7番出口 徒歩約5分

京阪電鉄 野江駅 徒歩約8分

前回 第30回の内容

聞き合う授業、話し合う授業

「聞く・聞き合う」ことを考える素材として、映画『青い鳥』(原作 重松清 監督 中西健二 主演 阿部寛)の部分を見ました。——◆2学期最初の日、(1学期にノグチくんが自殺未遂をしたことがまるで嘘であったかのように)登校してくる校門でも、2年1組の教室も生徒たちは普段と変わらぬにぎやかな時間を過ごしている。そして始業のチャイムが鳴る。休職中の担任に代わって非常勤講師のムラウチ先生が2年1組の生徒たちの前に立った。「…キュ・キュ・キュ…」、先生の口元から漏れる異様な「音」に教室中に緊張が走る。「ヒ・ヒキョウ ダナ」、何を言われたのか、いったい何が起こったのか、生徒たちは顔を見合わせ、今教室で起ころうとしている異常な事態に身構える。緊迫した空気の中笑いをこらえる者がある。先生の吃音(どもり)の声をまねながら、今にも笑い声が弾け教室に広がろうとしたその時、ムラウチ先生は怒鳴り声をあげるのでもなく、力づくで威嚇するのでもなく、言葉をつづけた。(おそらくここが2年1組がまた学級崩壊を起こすかどうかのターニングポイントだったと思う。)
「ひ、ひきょうだな。忘れるなんて、ひきょうだな。先生はどもります。あんまり上手にしゃべれません。でも本気でしゃべります。だからみんなも本気で聞いてください。本気の言葉を本気で聞くのは当たり前のことです。みんなはそれができなかったから、先生はここにきました。」——

ここには、教室で「聞く」ことがなぜ必要なのか、その本質的な意味が語られていると、私(松森)は思っています。だから子どもたちに「聞くことは相手を大切にすること、ひいては自分が大切にされることだ」と、1年生から6年生にまで、或いは通じているのかどうかわからなくても、何度も繰り返しながらしつこいくらいに言い続けてきました。

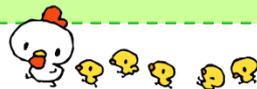
「聞く」ことをめぐって参加者の経験や実践を通じた話が交わされましたが、現実の高校(学校)現場は、昔も今も映画のように行かないはるかに厳しい実態があるとの意見がありました。スタッフの松井さんは、次のような感想を寄せました▼学校教育に限らず、子どもたちには、人の言葉を真剣に聞いたので自分が成長できたという実感を少しでも多く経験してほしい。できればある人の言葉から始まって、みんなで考えみんなで意見交流をしたので、自分が成長できた、と集団としての経験——研究会の意見交流でどなたかがおっしゃっていた、授業の中で間違った答えが出た場合、その子のおかげでこのクラスは深く勉強ができた、という実感をもつような経験——ならもっと望ましい。▼教師からいくら「しっかり聞きなさい」と言われても、「聞く」ことを通じた成長の実感(心地よさ、学び)の経験がなければ、聞こうとする態度は生まれません。その経験と出会う、経験をつくる、出合わせることからか。

松森俊尚(スタッフ)



研究会のようす

今回 第31回は



「聴くということ」に寄せて 関山 城子さん(小学校の心の相談員)

私が人の話を聞けていないなんて自覚を持ったことは、2000年までは全くなかった。ある事が起り、直面して、大わらわらになって、私にとっての大地が鳴動した。そこで、初めて、自分はきいていなかった～、心を砕いてこなかった～、と……。

以来、自分の生き方を問うてきた。そんな過程を経て18年、「聴くということ」の重要性を実感させてもらっている。
※今回も「聞く」というテーマで継続して考えます。(松森)

「学びをひろげる」スタッフ 松井 直哉、 松森 俊尚

連絡先 松森 (☎090・1960・3469 ✉matumori@crux.ocn.ne.jp)

★次回第32回研究会は、2019年11月9日(土)午後1時45分～ 城東区民センター会議室にて★